



幻の魚を求めて

〈パート1〉

J・D・サリンジャーという作家の作品の中に、「ニン・ストーリーズ」という短編集がある。その中の一編に「a perfect day for bananafish」（バナナ魚にもってこいの日、とか、バナナ魚日和、とか訳されている）がある。

作品の紹介はまたの機会にして、私が何ともひっかかる個所があった。それは、「bananafish」とはそもそも実在するであろうか、ということである。

作品のあとがきをみても、世界的に権威のあるとされている「Oxford English Dictionary」をひいても何にもでない。

中味の乏しい頭をさかんにひねったあげくに飛びついたのが、何のことはない魚類図鑑であった。それでも小さいものにはでていない。そこで図書館に駆け込み、バカでかい図鑑を見つけ出し、後の索引を懸命に調べる。すると、あったのである。さっそくページを開いて「ゴタイメン！」

和名「ウメイロモドキ」、ブルーとピンクのきれいな魚であった。スズキ目タカサゴ科タカサゴ属で、体長40cmにも達する。八丈島、小笠原諸島、沖縄、フィリピン、東インド諸島、メラネシア、紅海などに分布するといわれ、食用魚として、かまぼこの原料に優良であるという。（英名）Red scad、（オーストラリア名）Fusiliers, Bananafish、（マライ半島名）Delah とも呼ばれている。

本の題名としては、確かに「バナナ魚」のほうが面白そうではあるが、せめて和名ぐらい訳注として掲載するのも親切というものであろう。世の中には眼の色を変えてさかしまわる人種もいるのだから。

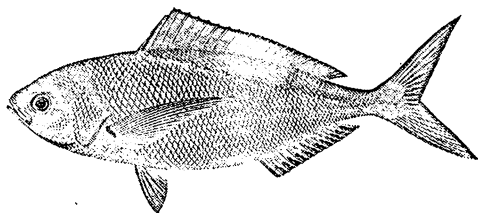


図-1 ウメイロモドキ (bananafish)

〈パート2〉

学生時代、英語の勉強を兼ねて、本屋の大特売で見つけた短編集（なぜか原書であった）を読んだことがある。もう作者の名も、題名も忘れてしまったが、その本の中の一編が妙に気に入り、翻訳を試みたことがある。

「ある夫婦が釣り船を借り切り、1日海に釣りに出かけた。あいにくその日は全然釣れず、夫はイライラし始めている。妻の方は、何とはなしに釣り船の船長が気になるが、それ以上の感情はない。やがて夫の竿に当りがあり、大物だと興奮のあまり船長の忠告を無視して逃がしてしまう。その夜、港のバーで、夫は仲間と酒を飲みながら、大物を逃したのは、釣り船の船長のせいだと騒いでいる。偶然に別の席にいわせた船長は、だまってそのバーを立ち去っていった。それを見ていた妻は、夫に冷たい眼を向けるのであった。」

というような内容で、1日のでき事の中の、妻の心理のゆれ動きを描写していて、どことなく捨てがたい作品だった。

その中に、「bone fish」という言葉がでてきて、翻訳は、そこで行き詰まってしまったのである。並の辞書にはのっていない。この時も「Oxford English Dictionary」を引いたが、わずかに引用文の一節としてのっているのにすぎなかった。そこでまた魚類図鑑である。やっぱり掲載されていた。さすがである。

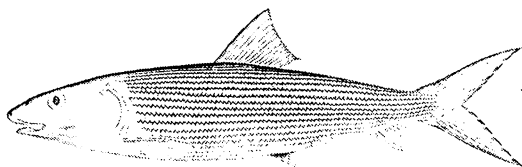


図-2 ソトイワシ (bonefish)

和名は「ソトイワシ」で日本ではほとんど捕れない。ニシン目ソトイワシ科ソトイワシ属で、体長30cmから時として1mにも達し、地中海を除く熱帯から温帯に分布するという。

（英名）Tarpon, Banafish, Lady fish, Bone fishという。ちなみに、英語の勉強には原書を読むのが良いとされているが、古典や論文などでは途中であきてしまう。そこで私は、推理小説かポルノ小説を推奨したい。これなら最後まで興味がつきないのである。推理小説なら、わりとオーソドックスな英語が（種類にもよるが）、ポルノ小説なら、口語、陰語の勉強ができる。しかも、ボカシはない。ただ意味がわからないとつまらないが、最近口語用の英和辞典が出版され、大いに売れているという。同好の士はいるものである。（伊藤）

資料 大平洋有用有毒魚類図鑑 講談社

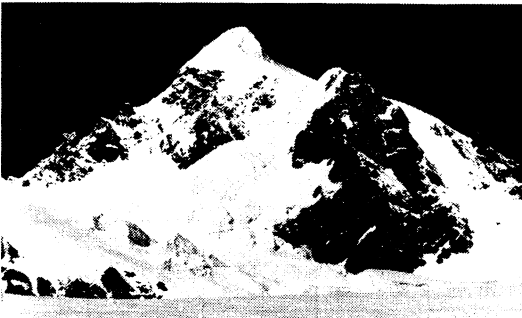
夢を登る (3)

—ガルワール・ヒマラヤ遠征隊—

10月1日、タルコット攻略が開始された。高度順応に注意を払いながら未知の高度を1歩1歩とつかみとる。隊長から体調の良い者に限って率先して登って良いとのこと。距離と日数と体力を勘案してすぐに希望する。最終的には11人で組織された。

10月2日、ABC（アドバンス・ベース・キャンプ）建設（4,630m）。ここからのタルコットは鋭くそそり立って見え、これからのルートを目で追う。懸垂氷河ゆえ急激に高度を下げるためクレバスが縦横に走り、セラック帯の通過がキーポイントとなろう。

10月3日、C₁ 建設に向う。ルートはセラック帯の弱点を突きつつ、登降をくり返ししながら進む。第1次アタック隊を残してABCに戻る。



タルコット峰 (6,099m)

10月4日、C₁ に向け出発、C₁ (5,100cm) から上部を見る。第1次アタック隊が小さくセラック帯に見え隠れる。時間的に見てかなりセラック帯の通過に手間どっているのであろう。20時、喜々とした顔をしてアタック隊が戻ってきた。明日のために、ルートの状況と頂上直下の雪壁帯について聞く。彼らは頂上まで9時間を所要していた。天気は常に11時近くになると必ずガスがかかってくる。この状況から時間を逆算し、我々4人の第2次アタック隊は、頂上から展望を得るため明朝2時出発と決定し、待望のアタックに備えてシュラフにもぐった。しかし興奮してなかなか寝つかれず、ウトウトとすることで出発時間がせまる。

10月5日、勢いよくシュラフを飛び出し外に出た。まばゆいばかりの星空である。1:45発。星をカンテラに進む。雪はしまっていてアイゼンのきしむ音が小気味よく闇に聞こえる。眼は空いているが、非常に寒く、足先が痛い。足踏みしながら休む。頂上取付点までわずかという6:10。背後の山脈が黒いシルエットを映き出しタルコットがバラ色

に染まり始める。モルゲンロートの瞬間、その幻想的ともいえる美しさと静寂の中に身をおく。太陽の恵みを受け、腹を満たし、気力十分にて最後の難関へと取りつく。隔時登はんにて登る。5~6歩登って息をはずませる。8ピッチ目が終ろうとする時、手が頂稜にかかった。ピッケルを打ち込み、グイと体を持ち上げると目の前の雪壁が消え視界がパッと開け山脈の果てまで抜がった。10:03、タルコット峰の頂き(6,099m)に立ったのである。頂上は、巾50cm、長さ5・6mぐらいで両側がスッパリと切れていた。頂上と確認し、思わず「頂上だぞ!」と登ってくる3人の仲間に向かって声を上げ、ガッツポーズをとる。3人が同じようにポーズをとって答えた。ああ!登った。5年越しの恋が実り、帰ってみんなに会わず顔ができたと今考えればつまらぬ、しかしその時までの偽わらざるプレッシャーが霧散し、晴々とした気持ちが体一杯に広がっていった。展望は期待どおり素晴らしい。マイクトリ(6,803m)そして夢にまで見たガルワール・ヒマラヤの盟主、ナンダ・デビ西峰(7,816m)がどっしりと構え王者の風格で他を威圧している。パウリ・ドワール(6,663m)の素晴らしいヒマラヤひだ。そしてその彼方には初のヒマラヤ遠征が実施された(1935年)ナンダ・コット(6,861m)が遠くから我々に祝福の笑顔を見せてくれた。体中に湧き起こる喜びを感じる素晴らしい光景である。ペンが折れるほど力を入れてもその素晴らしさを表現できないもどかしさを感じる。日本出国から14日目であった。

頂上での展望を満喫し、慎重に下る。クタクタとなってC₁に着き(14:40)、明日アタックメンバーの暖かい祝福に迎えられた。疲れた体と満足感を暖かいシュラフに包む。素晴らしく充実した一日は終わった。

翌々日、ABCからバノッティー峰(5,645m)をアタックし、そのまま、一週間ぶりのBCへと下ったのである。そしてこの日(10月7日)をもって、成功のうちに登山活動は終了することとなったのである。

(桧山)



ついに頂上!